

粉川昭平教授大阪市立大学定年記念講演「植物学と考古学」(1990年3月10日)

The commemorate lecture of Professor Shohei Kokawa at the retirement of the Osaka City University, March 10, 1990

故粉川昭平先生は、1990年3月31日をもって32年間勤続された大阪市立大学を定年退職された。3月10日には、それを記念して講演会とパーティが大阪市立大学の田中記念館で開催された。講演会は15:00~16:00の1時間弱と短い時間ではあったが、「植物学と考古学」と題された講演内容は、在職中の後半期に精力的に取り組まれた研究内容を的確にかつ正直にまとめられ、調査研究の回想と若い研究者に託す思いが込められていた。この講演はテープに録音されていたが、活字など他の手段で公表されることはなかったため、今回、粉川先生の追悼にあたって、テープから起こした原稿を収録することにした。ただ、残念にも、テープの不足によって最後の数分のあいさつが欠如していることをお断りしておきたい。

原稿を起こすにあたっては、できるだけ粉川先生の話し言葉をゆがめないように心掛けた。どちらかと言えばゆっくり話される方で、述語を省略されることが多い独特の話し方は、時には理解しにくいこともあるが、そういう時には聞こえない言葉を添えるようにした。すでに故人であるため、確かめようのないところもある。誤解があったとすれば、それはひとえに私の責任である(辻 誠一郎)

粉川昭平でございます。ここに採用されて32年がたつてでございます。満点の教授とはとても言えないので、申し訳ないと思っております。ああしておけばよかった、こうしておけばよかったということばかりです。だから、願わくば健康が維持できて、4月1日から頑張ろうと思っております。まずかったことばかりが思い出されまして、いろんな方にご迷惑をおかけしています。それを取り返すためにも、4月1日から頑張ろうと思っております。4月1日というエイプリル・フールですね(笑い)。とにかくそんなふうに思っております。

わたしは前任者の三木茂先生に教えていただいたわけで、三木先生の仕事が絶えないように細々ながら続けてきたわけです。何か意義があるとすれば、そういうことだと思います。幸いにして、南木君とか百原君とか、直接仕事を発展させてくれる人が出ましたので、非常に良かったと思っております。今後はどうしてもぎりぎりにならないとできないたちが、ぎりぎりになってもできないことが多いのですが、そういうのが残っていますので、しばらく来させていただいて整理に鋭意努力したいと思っております。

なんでも素早くやらんといかん、勉強せねばならんというのは当たり前なことなんです、定年退官後のことを考えて

も、やっぱり若いときからなまけずにやっとかんといかんということが今度わかりました。ぎりぎりにならないとできないというのは悪い癖だと思っております。

今日は、最近取り立てて頑張ったという仕事はないので、昔のことで申し訳ないのですが、だからいつも話しておるようなことなんで、身近におられる方は何回も聞いておられることで申し訳ないのですが、スライドを使って、辻君の話にありました考古学の遺跡から出ます植物遺体というのを紹介させていただきます。それにつけても、今、辻君の紹介にありました文化財科学会ですね。これは東大の人類学教室の渡辺直経(ちょっけい)先生、ほんとうは直経(なおつね)先生ですが、ちょっけい、ちょっけいと言っています、その直経先生がひじょうな努力をされまして、今日立派になった学会なのですが。そのお陰で、いわゆるふつうの考古学だけでなく、ずいぶんいろんな方面、たとえば物理、化学、生物学、生態学のたくさんの方が集まりまして、ひじょうな飛躍的な進歩を遂げたわけで、渡辺直経先生の功績はひじょうに大きなものがあると思っております。中でも物理化学の方法を使って考古学的な対象を研究するというふうなことですね。たとえば年代の測定であるとか、アイソトープ・ジオケミストリーとかですね、なかなかおもしろいなあと思うのですが、わたしなどなかなか十分に理解するということにはいきませんが。そういった方面ですとか、農学の方面の優秀な方の寄与であるとかですばらしい発展があって、現在もそれが続いていると思います。

わたしのやっていますのは、遺跡から出てきます種子とか木の実とかのまず同定をやって、それから現代の生態学の知識とか、もちろん考古学的な記述と突き合わせまして、われわれの先祖の植物とのかかわりといったようなことを明らかにしようとしているわけです。やはりそのモト(基)になるのは同定で、植物のいろんな部分のかけらが出てくるわけですが、どういう植物のどういう部分かということをもっと正確に同定することが大切です。それですから、三木先生から教わった教訓がひじょうにありがたかったと思っております。十分にできませんが、できるだけできるようにかねがね注意はしております。

最近ですね、ひじょうにおもしろかったのは、十万円金貨の事件です。あの事件のことを注意深く新聞を読んでおりましたが、偽物と本物をどうして区別するかということにもともとひじょうに関心をもっているんですが。あの場合は、金貨は純度、大きさ、重さその他が本物と同じだったそうで、そうなってくると偽物ではないではないかということ

になりますけど、まあそれはどうでもええですが、あの場合は、日本の造幣局が製造したものでないという意味での偽物と思いますが、あの場合、あの偽物を見破ったのが富士銀行本店のベテランの女の方なんだそうです。名前は伏せられているらしいのですが、それは日銀本店で一年半以上にわたって本物と思っていたそうなんです、何かおかしいと気づかれたのか富士銀行のそのベテランの女の方ですが、その気づかれた理由というのが、金貨を入れた袋のわずかの手触りの違いと、何か色あいが紫がかったということなんだそうですが、そういうことにわたしは非常に感銘を受けたのであります。そういうことが当たっていたわけですが、そういう感じ方というかそういう能力というのが大事だと思っています。それを説明するのはその後で、そういうことが正しいということは後で説明すればいいんで、最初のヒントはそういう所にあると思うんです。

また、その前にあった偽物事件はガンダーラの仏さんの事件で、あの場合はわからなかったですけど、偽物とは何ぞやというということになってきたように思いますね。あの時も微妙な点があって、何かいろいろとさしさわりがあるためか、ああいう事件はたいていうやむやになって終わってしまうようなんですが、あの時でもやはり本物という人の立場も偽物という人の立場もどちらも正しいということであつたらしいのですが、偽物とは何ぞやということを議論せんといかんような状態であつたようです。そこらへんのことはひじょうにおもしろくて、かねがね注意しておるといわけです。それから科学警察の研究とか実際の同定の問題で興味を持っております。

そんなことで、小さなかけらのようなものでも同定しようと思ってやってきましたが、もとより充分できていません。

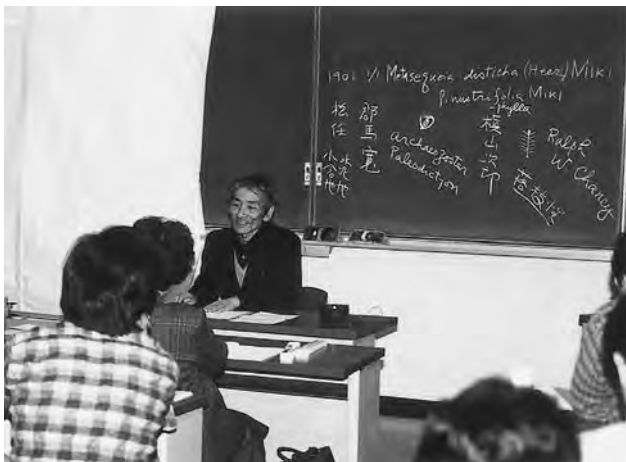


図1 1988年11月13日、第3回植生史研究会シンポジウム『温帯針葉樹林の性格と歴史』において「三木茂先生の研究とメタセコイア」と題して講演される粉川昭平先生。この講演の記録は『植生史研究』No.5(1990)に収録されている。

今日は、今まで見てきたものの一部ですが、江戸時代、奈良時代、それからその前の飛鳥時代といったような遺跡から出てきました植物の遺体の中で、多少とも興味あるようなものを見ていただけたらと思います。これはもう何回も見ていただいているもので、一部の方にはしょっちゅう見ていただいたものです。だいたい前に作ったスライドで、もうカビが生えてまして、本当にカビが生えてました。ちょっと歯が抜けているので、発音しにくく、不明瞭になるかと思いますが申し訳ありません。

一番最初は東京都千代田区の一橋高等学校の運動場の工事中に江戸時代の前期の町跡が掘り出されました。加藤晋平先生その他の方がずいぶん努力されて発掘された時の資料ですが、例によってモモがたくさん出てきます。モモは大きくて堅くて腐らずに目立ちますが、さかんに取り上げられます。現代の白桃(はくとう)というのとはだいたい形の違うのがずいぶん出てきます。モモの問題は一つの焦点になっておりますが、いろんな人がたくさん取り扱っていますが、なかなか総括的に、そして満足いくような研究は程遠いのではないかと思います。モモというのは、やはり弥生時代初めに北九州へ中国北部から伝わったのが最初であろうということになっておりますが、最近、同志社大学の森先生や辻君やわたしどもも共同して、長崎県の佐世保の近くの伊木力遺跡を発掘して、その時の調査でモモが縄文時代の古いところから出てきました。いまのところ日本全国で縄文時代から出てきた確実なモモというのは伊木力遺跡だけなんです。それ以来弥生時代になりますと、米といっしょに入ってきたのか、弥生時代からは各地で見られます。もちろん江戸時代は見られて、現在の白桃というモモは明治初年に入ってきて日本で改良されたもののようなのです。これは江戸時代初期のもので、これはもう立派なモモで、現代のモモと比較しても遜色のない大きなモモです。ところがやはり多少細長いモモもあります。形態と品種とかいうのはどうもわたしも分かりませんので、資料は充分ありますので、何とかしてモモをやらんといかん思っております。願わくば現代の果樹園芸学に通じておられる先生方があついただけたらとかねがね思っておりますが、なかなかそういう方がおられないのが残念です。モモであることは直ちに分かるわけですけど、系統上どうであるとか、そういうことは難しく、分かりかねております。こんな細長いものもあります。半分に分かれています。この黒い点のようなのはカビのようです。

次ですが、同じくバラ科ではこれはウメです。標本にしてしょっちゅう眺めていけば、ウメであることは誰でも同定は簡単で、ルーペもいらんです。ウメは弥生時代に例があります。だから、よそから入ってきたといってもいいと思います。それと何回も入ってきた。途中でなくなり、また入ってきた。一回入ってきて広がったというんじゃなくて、何回も



入ってきたとか、途中で消えてまた入ってきたというのがあるに違いないですから、そういう歴史を明らかにするというのが、ひじょうに難しいですが。たとえば最古のウメはどのへんから出るか、正確なデータとして記録したいと念願しております。これは江戸時代のウメの例です。これはクルミですが、クルミは大昔の地質時代からオニグルミの系統があったわけですが、それを縄文時代以来われわれの祖先が食用にしていたわけですが、これは江戸時代の遺跡から出てきたんですが、人手が加わった一例として。このクルミは石の上に置いて、人間が石か金槌かも知れんですがたたいた例です。先が飛んでおりまして、底の方に割れ目があります。ガチャンとやったに違いない。実際やってみたらこんなふうになります。江戸時代の町並みですので墓地も出てきたわけですが、たくさんの人骨ですね、樽のような棺桶の中から人骨が出てきたんですが、そういうところから穴のあいた円形の小さい直径5mm程のものが出てきました。良く見るとこれは材木で材片を加工したものでありまして、種子ではなかったですが、この材片は島倉先生が同定されまして、確かハンノキの材であったと思います。これはおそらく数珠のようなものでなかったかということでもあります。次のこれは墓地から出てきた果実でありまして、ポダイジュで、仏教に關係するような植物が墓地から出てきております。

その次、いろいろなものを見ているうちに出てきたもので、これも何回も話をして気が引けるんですが、初めて聞かれる方もおられるかも知れませんが。これは見たこともないような変なもので、炭になって炭化して残って残っておりますが、これはいったい何だろうと、こういうのがいくつか出てきます。これはピンロウという南方のヤシの果実であることが分かりまして、これは漢方薬として薬にもなりますし、ピンロウの種子はピンロウジと言いまして南方から持ってこられたものに違いない。時代から考えて、長崎の出島経由で入ってきたものに違いないと思っております。出島の記録にもピンロウジをバタバアから運んできたという記録があったりしていますので、多分そうことであろうと思えます。その同定ですが、断面をとりますとこんな風で、子葉がしわくちゃになって、子葉そのものは残っていませんが、その表皮がセルロースですから残っておりまして、ひじょうにしわくちゃになった子葉をもっておるとのことその他から同定しました。これは別の個体の縦断面で、これは上から見たもので、ピンロウというヤシ科の植物で、台湾以南ではスライスしてキンマの葉に包んで石灰を入れて噛むわけです。口の中が真っ赤になりまして、タバコに使うわけですが。実にまずいもんですけど。香辛料というか薬にもなるようです。現在でも、奈良の古い土蔵から出てきたりするようです。それは明治とかの土蔵なんでしょうけども。次は、これが今出てきたピンロウジ。こんなふうにくリスブというの

か、ちぢれたような子葉が入り組んでいます。これが出てきたわけですが。

これは天王寺で買ったキーホルダーです。これは山形のサクランボですが、色が塗ってあります。これは後で出てきますが、チョウセンゴヨウの種子です。これがツバキの種子です。磨いてあって、色が塗ってあるとごまかされますな。これはみな人工物です(一同笑い)。こんなのがみんな化石で出てきますので、捨てずに標本にしてあります。

その次、もう一つおもしろいもので、こういうのが出てきたんですが、これは割と大きいもので2mm半程、球形のもので、種子や果実ではないということでもあります。何であつたかという、おそらくダンゴのようなものであつたろうと思えます。ケミカルなことやいろいろな調査をやるべきですが、これはまだやっておりませんが、そういうものではなかろうかと思えます。そういう目で見ていきますと、何か指紋というか、掌紋というか、そういうものがあるような気がします。こういうのがいくつか出てきて、面食らいます。これは種子や果実ではなく、ダンゴのようなものが焼けたのではないかということです。その次、別の個体ですが、こんなふうのがあります。これはご飯の焦げたものです。これは、米の専門家に見ていただきましたが、イネには違いないですが、オリザ・サティバには違いないのですが、炊いてご飯にしたものが焦げたものですから、オコゲということになります。江戸時代でしたら時代が数百年で新しいですから、保存もいいし、分かりやすいですから、人間と關係した変なものが出てくるわけで、近世からはひじょうにおもしろい。あんまりやっていませんが。

次は奈良時代の例であります。これは奈良の国立文化財研究所で数年前に発掘されました平城京の苑池といひまして邸宅の庭に造られた池の泥から出てきた植物の遺体です。平城京の左京何条なんぼか忘れましたが、今、奈良市の文化センターになっております。ひじょうに素晴らしい状態に復元されて保存されているところです。あんな風にきれいなればほんとううれしいのですが、どこもみんなそうなるとは限らないので残念ですが。そこはほんとうすばらしいです。一度見てほしいと思えます。奈良市の新大宮の近くの文化センターの庭に、その池が復元されていて、とてもおもしろいS字状の池です。奈良時代の池で、長屋王の御殿の対岸というか、道を隔てて南側のところ。S字状の菰川という川の流れを利用して作った池であつたわけですが、その池に堆積した泥をほじくっているといろいろなものが出てきます。これは池ですから水草があります。これはヒシです。これはあまりかわりばえのしないヒシですが。これは池ですから水辺に生える植物の種子や果実が当然見つかるはずですが、これはゴキヅルという水辺に生えるウリ科の植物の種子です。水草が当然あっていいわけでありまして。これはヒルムシロの仲間

の種子です。小さいものですが、ヒルムシロの同定は難しく、属までしかやっていますが、三木先生が詳しくやっておられました。同じく水草でヘラオモダカです。池のまわりとか周辺部の浅いところではアシとか水湿地を好む植物も当然あったに違いないと思っておりますと、やはり、こういうイネ科の稈・茎が出てきます。これは焼けて炭になっているので、形がよく残っているのですが、そういったイネ科の茎だろうと思います。

そういう所に近くにあったのか、あるいは流れてきたのか、マツカサも出ます。これはおそらくクロマツの球果であろうと思います。その次、中にこういうマツの球果の軸だけになったのが出てきます。これはリスとかムササビとか、そういった動物がかじって捨てたものです。これは出てきたものではなくて、奈良公園で拾ったものです（笑い）。次は本物。これがS字状の池の泥から出てきた、こういうひじょうに痛んだマツカサの球果軸であります。これを詳細に見てみると、先程のような齧歯類にかじられたものでなかったと思います。かなりよく似ていると思うのですが。これも奈良公園で拾ったもので、ムササビですか。だから、こんなのもみんな拾って標本にしてあります。この白いところは木部で、遺跡からも出ます。奈良時代や天平時代にもリスやムササビがおったと、そんなの当たり前かも知れんですけど。

これはS字状の池の北側の、その池の続きから出たという大型のケヤキの葉です。ひじょうに大きな葉で、これが1cmですから10cm近くもあるようなケヤキであることが分かります。理学部の前のケヤキ並木を見ていますと、こんな大きなケヤキの葉はないのですが、枝打ちした時とか台風にやられた時にはこんな大きな葉があります。何らかの理由でこういう大きな葉っぱがあったことは確実に、どこかにこういう木があったことになりまして。それからクルミですが、これはオニグルミの変種になっておりますヒメグルミで、割と個体数の少ないクルミが出てきております。このナッツが普通のクルミとずいぶん違うのでありますが、その他の性質は区別できないので変種になっております。これはオニグルミで、先程は江戸時代の例でしたが、これは奈良時代の例で、まったく同じように先が飛んで底の方に不規則な割れ目があります。

ここから別のところで、今までは奈良時代で、これからその次の飛鳥時代の例であります。どこから出たかと言います

と、奈良県南部の大和三山の中央部にあります藤原宮址という持統天皇の頃の日本最初の大規模な宮址であります。その回りを巡っていた溝から出たという資料です。これはだいたい前の出土品でありまして、当時は檀原考古学研究所が発掘をしておられた頃で、溝の中から文字を書いた木簡ですね、それと一緒に多数の植物の種実類が出てきましたので、それを見せていただいたのですが、現代生えているのをしょっちゅう見ておりますので、ただちに分かります。ただちにはないかも知れんですが（笑い）。これはヤマモモで、いろんな特徴があります。藤原氏ですから1200年くらい前ですか、保存状態の生々しいヤマモモです。ヤマモモはシンボルゾーンに実っていますが、いつの間にかすぐなくなりますけど。次、これはキカラスウリでウリ科の植物です。次はムベであると同定しましたが、ムベというのはアケビに似た常緑の葉の食用にしたのに違いない。これは飛鳥時代のウメであります。先程江戸時代のウメでしたが、飛鳥時代のウメで、当然あってもおかしくない。これはオオムギであると思います。と、とにかく炭になって穀粒は残っています。栽培品の研究というのは、もっとも大事でありますから、イネとかムギとかアワとかヒエとかいったものは、人間にとって、とくに日本人にとって重要な食料でありますから、詳しい研究があります。ただ、アワ、ヒエ、キビの同定というのは難しく、東大の資料館におられます松谷暁子さんは正確な同定をされるとは思いますけど、とにかく難しいです。アワ、ヒエ、キビというのは、ちょっとやそっとでは分かんませんが。これはムギです。そのほか、エディブルというか食べられるものはいっぱい出てきますが、これはグミです。グミの仲間でおそらくナワシログミといったものです。その次、ナツメが出てきます。ナツメは割とたくさん出てきますが、いろんなタイプのナツメが出てきて、ナツメであることは直ちに分かります。ナツメはこれより少し前の時代から初めて出てきましたが、やはり飛鳥時代の前の頃に日本にだれかが持ってきたに違いないと思います。それ以前では、こういう堅いものであるにもかかわらず、お目にかかったことがありません。こういったものが飛鳥時代頃からたくさん出てきて、文献でもあることが分かりますし、やはり中国から持ってこられたと思います。

（辻 誠一郎、〒285-8502 千葉県佐倉市城内町117  
国立歴史民俗博物館）